

倭国女王の翡翠勾玉

『魏志倭人伝』によると魏・呉・蜀の三国を統一した晋に、倭国女王壹與が大夫掖邪狗等を遣わし、男女生口30人を献じるとともに白珠5千孔、青大句珠2枚などの貢物を届けたのは、正始8（247）年か9年のことでした。当時、倭国は古墳時代に入った頃で、白珠は真珠、青大句珠は翡翠の大きな勾玉と考えられています。原文の「句」は「勾」のまちがいとされることが多いのですが、「句」は「勾」の本字であり「かぎ」を意味します。勾玉のあの不思議な形は、体から飛び出してしまう魂をひっかけてそれを引き留める鉤と思われまます。逆に外部から侵入する邪霊を防ぐ鉤でもあります。

魂（正確には魄）の色は青白く、勾玉も縄文時代以来、青い玉、つまり緑の翡翠で作られました。ところが、既に弥生時代から翡翠は貴重品で、弥生時代にはガラス、古墳時代中期以降は碧玉や赤瑪瑙などの代用品が多くなります。このように、勾玉の歴史は、本質の忘却にともなう代用品の変遷とも言えます。

倭国女王が魏の皇帝に貢いだ青大句珠は、頭部に数条の刻線がある翡翠の大型丁字頭勾玉と考えられます。この形は弥生時代中期後半頃の北部九州で出現し、後期・終末期には筑紫・出雲・讃岐などで散見される程度です。古墳時代でもその出土例は少なく、女王の勾玉も白珠の5千に対してわずかに2個というのは、それがかなり貴重な品物であったことを裏付けています。

（小山雅人）



奈良谷遺跡出土の丁字頭勾玉